

無政府恋愛を描く

— まず無政府恋愛とは

ここに無政府恋愛というのは、拘束なき恋愛ということであるが、從來あまりに拘束の習慣をもたされている人々は、拘束なき恋愛というと、ただちに病的反動たる「棄て鉢」的、「ふしだら」的恋愛を連想する。

ちょうど、無政府主義というのと、いかにも無秩序な主義のように思う人が多い。無警察状態とか、無国家状態とかいつて、あわれな囚われた人々は、警察と国家のあることによつてのみ、この世が安らかに過されると考えている。しかし、それは支配者の誤魔化しにのせられた結果そう思うので、歴史を学んだものは、右のようなもののない社会の平和な共產状態を、容易に想像することができるのである。人おのおのには協力、愛の性質がある。協力、愛が十分に発揮せられる時のみ、われわれの社会は平和でもあり、偉大な事業を遂行することもできる。クロボトキンがシベリヤで官吏であつた頃の経験を語つて、「上から支配しようとする時、ろくな仕事はできなかった。ほんとうの仕事は彼らの自治

にまかせた時のみ可能だつた」といつている。今のロシアでも、「社会農場」よりも「共同農場」の方が、はるかに成績をあげているといわれている。「社会農場」とは官吏がついて農場を支配する仕組のもので、「共同農場」とは、自発的に農民達が協力して経営する仕組みのものである。同じことはわが国でもいえる。地主が上にいて小作人達といつしよに農場の共管を試みる場合は失敗で、小作人だけで土地を買い取つてそれを共有する場合等は、非常によい成績を示すことがある。

政治にしても、われわれがある党のもとに拘束されると、それでもう身動きができない。党はどんどん腐敗して行き墮落幹部は輩出するが、手のつけようがない。最初は何とかいつても、後になるとすっかり諦めてしまわねばならない。そうするうちに、われわれは次第に政治に無関心となり、上の人々がいいようにするだろうと、何もかもめんどろくさくてまかせきつてしまふ。かくてわれわれは、すっかり無気力、無批判の「愚民」になる。

こういうように、「支配制度」は、「愚民培養」の制度で、すっかり愚民になりきつたわれわれは「自主」とか「自治」とかいうことは考えることもできなくなる。

けれど、われわれがそんなふうである間は、われわれは決して助からない。いつまでも下積みの苦しみの多い氣息えんえんの生活を続けねばならない。

今こそ立ち上がらねばならない。そして立ちあがる以上は、あらゆる禍根を、残すところなく、洗いざらい、根こそぎ、刈りとしてしまわねばならない。それには他の改良主義的な例えばマルクス主義のように、より善い支配制度によつて、なしくずしに改良して行

くというような、不徹底な誤魔化し思想にだまされてはならない。

われわれの政治的自覚とは、政治に参与することではなく政治を否定することである。政治、支配、強権、これらの一切に絶対反対を唱えることである。

それと同じように、すべてのこともそうでなくてはならない。この世のありとあらゆる現象は、相関的であり、有機的である。恋愛現象においても、われわれは従来の「拘束」的の考えを一掃し、あくまでも自由な恋愛をめがけねばならない。自由な恋愛、これがすなわち無政府恋愛にはかならない。その自由の内容は前号「性の処理」でも、いくぶん書いておいたが、なお順を追うて考えて行きましょう。

二 婦人と恋愛と社会的自覚

婦人であるからとてことさら恋愛問題を取り上げることはないというものがある。また恋愛問題から社会的自覚に到達するなどとは考えられないというものがある。間違つた認識不足のたわごとである。

わたしどもは「恋愛なんて」という。恋愛なんて問題にするに足らぬと。これはいかにも賢い言い方の方であるが、その実これはどわたしどもの無知をあらわす言葉はない。なぜならこの言葉は、男子（従来の男子）的の考え方であるばかりでなく、搾取者の考え方である。ごらんなさい、従来の男子専制の社会、搾取者の社会では、常にお題目のようこの言葉がいわれてきた。例えば、徳川時代を見よう。武士だの、道学者だのの考え

十 四

方——そこでは「国家」の大事業の前に、いかに「色恋」が、私事として卑しめられてきたか、このことは現在の資本主義政治家や、学者の考え方とも一致している。ではなぜ彼らはこんな考え方をするか。これには二つの理由がある。

その一つは彼らが男子であることである。男子は恋愛問題に対して無責任的である。彼らは性行為を排泄的にのみ見る身軽な立場におかれている。ところが婦人はそうではない。婦人にとっては、恋愛はただちに妊娠となり出産となるところはなはだ現実的のものである。恋愛問題に対する男子的の考えと、婦人的の考えとは、ここを境にして喰いちがってくる。

この理由の呑み込めない男子達や、自己の性からのみ決定されることの多い考え方をしている男子達は、婦人が「甘やかであるべき恋愛」の瞬間にすらも、「現実的なあまりに現実的な」考え方をしていることを、うるさく思ったりする。また、男子が要求する時にはただちに応ずるような婦人を、性的に新時代的であるなどと考えている。ロシアの新しい小説にはそんなものが多い。そこでそうした男子的の考え方にも媚びる一部の女達は、男子と同様の考え方をし、男子と共に「国家」の前には恋愛なんて小さいものだといったりする。こういう女は生理的に、「不妊」であつたり、妊娠の時期を過ぎた老女などであることが多い。だが、真に婦人大衆の立場にあり、もしくは婦人大衆に対して、切実な認識をもつものは、いかにしても恋愛問題を軽く見すことはできない。いかに恋愛すべきか、いかに妊娠および出産を処理すべきか——等々の問題は、婦人自身が取り上げないで

誰が取り上げるか。婦人がいたずらに男子的の偏見に付和雷同することは、独り婦人自身のためのみでなく、人類社会のために、大きな損失であるというほかはない。

さて男子専制の社会が、恋愛問題を私事として軽視する理由の一つは、右にいったように、男子の「性」からきているものであるが、もちろん決してそればかりではない。男子の「性」を利用することによつて、抜目のない支配階級が、一層それを助長したのである。なぜならば、支配階級は直接搾取の対象——すなわち物資の生産のみ問題としている。すべての被搾取者を、一個營々たる生産機械たらしめんことが、彼らの飽くなき希望である。その場合、性の問題等はむしろ厄介な問題で、彼ら支配階級にとつては、彼ら以外のもののそうした「人間」的要求や生活等は、無駄なことだとしか考えられないのである。(もつとも彼らは生産機械の卵としての赤ん坊の出産は希望する。それは飽くまでも拘束された結婚制度の中に、生れながらにして鉄鎖につながつた赤ん坊のみが生れることが許される)。こういう事情のもとにあつて、人間的恋愛の極力卑しめられ、排斥され、否定されることは、あまりにも当然である。これが理由の第二である。

こう考えてくれば、「婦人が恋愛問題を取り上げる」ことをわらう者こそ、いかに無知あわれむべきものであるかが知られる。婦人が立ち上がり、これらの真実を、忌憚なく暴露、打倒せずして、誰がそれをするであらう。

西洋の御用哲学者は、「恋愛そは婦女子の道のみ」といつた。われわれは答える。なるほど婦女子の道かも知れないと。その証拠には、婦女子が自覚してきた近世において、恋

愛問題はにわかに社会的の問題として取り上げられ、論じられるようになった。だが、こうなると、もはや「婦女子のみ」の問題ではなく、男子の間でも、まじめに研究され、反省もされるようになる。そして少くともそこから新しい男子(自己の性のみに決定されない)も芽生えるのである。

婦人の自覚と恋愛問題、これは近世の歴史をよむものの、見のがすことのできない、相關的の現象で、すなわち婦人は起き上がる時に、この問題を伴つてきて、社会にむかつて提出したのである。以上は「婦人であるからとて、ことさらに恋愛問題を取り上げることはない」という者への解答である。

解答の第二「婦人が恋愛問題から社会的自覚に到達するとは考えられぬ」——なるほどわれわれが社会的自覚に到達する機縁はいろいろある。被支配者としての、無産者としての立場、これは一般にいわれていることでもあり、また事実である。われわれは実にそこにわれわれの社会的自覚の理由をもつ、しかしながら、それと同時に、婦人であるが故に婦人だけしか痛切には感じ得ない特殊の「片隅の苦しみ」がある。その一つはすなわち恋愛問題である。これは男子には分らないことであるが故に、彼らはこれに対して無理解であるし、従つて救いの手もさしのべない。(もつとも政治主義者は政治的必要から、上すべりのにそれらのことにも口出しをしたりするが決して親切にはしない)しかるに男子がそうであるからとて、自覚したと称する婦人(多くは男子模倣者)も、またその通りであるならば、一般婦人大衆は、その悶えを何にむかつて訴えてよいか。ゆえにほんとうに

自覚した婦人は、無産者としてのあるいはまた婦人としての、あらゆる部分を洩れなく代表することによつて、そこに切実な社会的自覚を打ち立てるであらう。かくて恋愛問題が何故婦人をして社会的自覚に到達せしめるか？ これは前にも言つた男子の性と婦人の性との相違から起つてくる問題であることが考えられてくる。

男子の場合にあつては、その性行為を通じて、社会的自覚に到達することは、よほど優れた客観と、暖い人間性との所有者をほかにしては、まずほとんどないと言つてよい。しかるに婦人はそうではない。婦人は性行為によつて妊娠と出産を背負わされる。

今日の社会では、どんな若い娘さんでも、恋愛を単なる、「愛」だとか「詩」だとか考へて、すましてはいられないのである。彼女は、恋愛と同時に「現実的なあまりに現実的な」妊娠の問題を考えざるを得ない。「社会的なあまりに社会的な」出産の問題に思い至るのである。

かくて、婦人にとっては、恋愛は一大事件である。恋愛は若いものにとつて不可避のこととあればあるほど、問題は一層重大となる。恋愛のあとしまつ、妊娠、出産の問題を、今日のように私事として葬り去り、そうすることによつて、全責任を弱い婦人に押しつけて返り見ないというようでは、婦人たるものは、「恋愛なんて」などと構えていられないのである。しかも、より人間的な恋愛であればあるほど虐待されるし、その虐待はもちろん婦人にのみかかつてくる。

今日のような社会では、性行為は拘束された鉄鎖の間か、婦人の欲しない不自然的な淫

行かをほかにしては、全く不可能である。こうした苦悩、不安、不満をひしひしと味あわされる時、それが直ちに社会への自覚となつて現われずにどうしていよう。性行為の背後にただちに妊娠と出産をもつ婦人——かくて婦人の性行為は、単なる愛でも詩でもなく、それ自身ただちに社会である。これ「恋愛問題から社会的自覚に到達するなどとは考えられない」という者に対する解答である。

三 結婚制度の起源とソヴェトロシヤの現在

インディアンの一部落では、女兒が八才になると地下の穴蔵にとじこめる。そして十三歳になつた時に一人の男が訪れる。妊娠するとはじめて地上に出され、赤ん坊は男の手に取り上げられ、女は一二年間乳母として雇われる。が、それを境として彼女の性行為は解放される。始めに誰かの正嫡の赤ん坊を生んだあとは、自由を許されるというわけである。

このインディアンの性行為は、結婚制度の起源を語る一つの型であるといわれる。すなわち、男は財産を相続させるために正嫡の赤ん坊が必要なのだ。そこで八歳から十三歳までの長い間土牢の中に女を、否、女の「生殖器」を監禁する。そしてそれを誰の手にも触れしめず生長せしめ、真正正銘の正嫡の赤ん坊をもうける。

わらうべき野蛮の風俗のようであるが、われわれの国の結婚制度にしても、これと少しも変らない。結婚は家名と財産を相続せしめるべき正嫡の赤ん坊が必要なところから作り出されたもので、「女は操を第一とすべし」などということば、インディアンの土牢にお

ける「生殖器監禁」と同じ理由からである。従つて保守的な女流教育家や、いわゆる良家の夫人達が、さも貞淑かの如く振舞つてゐるのは、「見よ、自分こそは監禁された生殖器だぞ」という気の毒な自己吹聴にほかならない。

結婚制度の起源に関するいま一つの型は、キリストの弟子パウロが、コリント前書の中で語っている。いわく「淫行を免れるために、人々々その妻をもち、各々その夫をもつべし」また「我いまだ婚姻せざる者、および寡婦にいわん、もしかくの如くしておらは、彼らに善きなり」というのは、「結婚せずにいられるならそれにまさる結構はない。が、そうも行かぬとすれば、淫行を免れるためにのみ結婚せよ」というのである。この考えこそは支配階級の考え方、すなわち「国家のため」とか「神のため」とかいうことを唯一のものと思はせることによつて、飽くなき搾取を行おうとする時、その妨げになるすべての人間の欲求をいかに処理すべきかと考え、なるべくそういう不生産的なことに手間どらせぬために、単一に組織づける。すなわち、めいめいに一つずつの性をあてがい、それを固定的に私有させる。そうするとそれによつて生れる赤ん坊の生活も、彼らに負担させることができると思へたのである。

従来われわれは、結婚制度の起源を私有財産の相続という点からのみ考えたが、それは間違ひであつて、それと同時に支配階級の私事的、蔑視的性欲観（被支配者の性欲を厄介視し、それから生ずる種々の性的負担を無視する）からきたものであることを知らねばならない。

いまや家名財産等の相続のための結婚（子を生むための結婚）は、封建時代を境として亡びつつある。資本主義時代の結婚の特徴は「子を生まぬ結婚」避妊を中心とする結婚であることが明らかになつた。（このことは後にいう）

そうしてみると、結婚制度の起源が単に「財産相続のため」のものであるならば、もはや資本主義時代では、結婚制度は亡ぶべきであるにもかかわらず、ベン・リンジーなどによつて盛んに資本主義的結婚の合法化が叫ばれているし、ソヴェトロシアでは遺憾なく合法化されている。すなわち結婚制度は何らかの理由によつて未だに必要なのである。何らかの理由——すなわち支配階級の理由、結婚の私事視における単一化と、それへの種々負担の転嫁とである。

従来にあつても仲のよい夫婦は、制度などはあつても構わないと思つていたし、仲のよくない者は、むしろ制度を憎んでいた。どちみち結婚制度とかそれに関する手続きとかは、われわれには面倒臭いものであるし、全然支配階級の便宜のためにできているものである。

ロシアでは初め「結婚は個人の私事である」ということを他の資本主義国とは違った形で証明しようとする都合から、登録結婚も無登録結婚も平等であるとした。その結果当然無登録結婚が登録結婚を遙かに凌駕した。クルースキーによると、モスコイ裁判所における三百件の扶養料支給事件につき、四十一名を除くほかは、短期の無登録結婚から生れた

ことが発見された。しかし、この状態は、資本主義国家の長く耐えうるところでない。すなわち「登録なきものは裁判の権利なし」と訂正されるに至った。(裁判によって、婦人はその子供の父から扶助料を受け取ることができるのである)ここにおいて徹底的に「結婚を個人の私事」とする一般の資本主義国(そうすることによってその赤ん坊を負担せしめる)と全く同じところに逆戻りしたのである。かくてソヴェトロシアには正嫡、私生の別はないといわれるが、それは表面だけのことで、内面においては(すなわち無登録結婚においては)私生児は依然としてあり、生存の権利が認められないのである。要するにこうした社会では、性の負担は夫婦の私事、夫婦の私事は畢竟、婦人の私事ということになる。夫が妻につながっているのは、頼りにならぬ法律とか、道徳とかの上だけでのことで、結局のところは赤ん坊と不離の關係にある母親のみに背負わされる。ましてアメリカやロシアのように、無秩序恋愛の行なわれるところでは、男子は一定の自分の子どもというものに愛着ももたねば、また果して自分の子どもであるかどうかも分らないから逃げられるだけ逃げる。そこで現在、ロシアにおいて最も困難で、最も数多く、全裁判の過半を占めているものは、性に関する事件であるといわれている。婦人がその解放を政治や法律の上にも夢みる間は婦人は決して解放されはしない。なぜなら政治や法律は繁文縟礼的の裁判沙汰とか紙片れとかに過ぎないからである。

四 資本主義時代と避妊

十二四

人間的恋愛が不自然的淫行に変わったのは、はつきりとは結婚制度成立以来のことであるといわれる。そうすると幾千年かの間そうであつたわけである。ブラッグ大学哲学教授エーレンフェルスによると、「約二千年以来文化的性欲道徳が起つて、人間の性生活を不純にした。この道徳は男子の生産力を一人の女に限ることを要求し、従つてそれ以上の男子の生殖欲は、やむなく娼婦との交接等多くは不生産的、秘密的、犯罪的に満足するに至つた。これは男子をして精神的に肉体的に病的ならしめた原因であり、それ以来男子は自然なる恋愛を失墜して、不自然なる淫行をしか経験することができなくなつた」とある。

これは男子の立場からいわれたことであるが、女子は一層はなはだしいとしなければならぬ。英のアリス女史によると、「女子には周期率的の性衝動がある。それにもかかわらず、結婚制度の結果、女子の生殖器は夫の所有物であるとされ、性衝動の有無にかかわらず、常に夫の性欲のもとに曝される。かかる性行為は、正しいものでなく、明らかに不自然的な淫行であつて、その結果種々の性病が芽生える。」

かくて健全な性行為は、ごく自然な男女の相思と、それによる自然な交接とであることが、今や全く明らかになつた。

元来、強権社会の発生以来、それらの性行為は全くおし歪められ、強権の便宜のため、維持のために、無惨に制度化されてきた結果、いま眼前に見る性生活は、ほとんど地獄の光景を呈している。

わたしは前に資本主義結婚の特徴は「子を生まぬ」結婚であるといつた。アメリカのモ

ダーン・クォーターリーに「今や性生活は生殖から愉樂へと移行した。それは避妊法の發明と共に」ということを中心として注目すべき論議がかわされたと伝えられるが、すなわち資本主義性生活の何ものであるかを物語るものである。資本主義社会では、もはや子どもを欲しがらない。性生活は愉樂のためにのみ存在するというのである。

この傾向は避妊法を促進し、また避妊法の進歩は、この傾向を助長した。今では動機はそれぞれ違うが、ブルジョアジーもプロレタリアートも、農民も、すべての者、婦人、誰も彼もが、避妊を否定するものはない。世界は驚くべき産児抹殺の時代を現出している。ラッセルによれば、英蘭においては、一八四一年から、出産率の記録が始まったが、この年から一八七五年に至るまでは出生率は一定していた。その最後の期間における最高は三五・五であつた。だが一八七八年における新マルサス主義宣伝の実行は、その瞬間より出生率を大變災的に低落せしめた。一九一一年の五箇年間に於いては、出生率は二三・六に低落した。一九二九年には一六・五となつた。

最近の報道によると、ドイツにおいては墮胎率は妊娠の三十パーセント、ロシアでは二百万の産児が年々否定される。アメリカの一地方では各二人半の出産について一件の墮胎が行なわれるというが、これらの統計はもとより完全を期し得ないもの、殊に避妊率は統計不可能であるが、墮胎に比べて遙かに高い率であることは肯づかれる。リンジーによると「性的経験のある女学校年代の娘四百五十九名のうち、妊娠したのは僅々二十五名、他の連中は大部分避妊法を用いていた」といい、またカルバートンはその著書の中に「結

十三分

結前に性交を行つた七十一名の婦人中、五十人は避妊を行なつていた」という報告を載せている。

避妊の乱舞、産児の濫殺である。それと共に考えられることは、男子的恋愛——性欲排泄のための恋愛、愉樂のための恋愛——が今や最後の一大舞踏を演じつつあるということである。カルバートンはこの一大舞踏を、輝やかしき新性道德の誕生とよんでいるが、婦人の立場から見ると、不自然的淫行の最後の死物狂いであるというほかはない。「男子的恋愛と女子的恋愛との正しき折衝にこそ眞の恋愛は生れ、それがまた男子をも女子をも満足せしめ、子孫をも生かすことになるのであるが、今日のそれは偏奇的病的の現象でしかない。

かくてそれらの避妊および墮胎は、もはや蔽いがたい事実であるから、法律の上に取り入れることは、資本主義各国とも、もはや目前の問題となつてきている。つまり「子を生まぬ」結婚の承認こそは、資本主義国が自らの結婚制を公然と完成する最後の段階である。目下、ほとんど公然的にはオランダ、半公然的にはフランス、アメリカその他の大部分の資本主義諸国が、これを認めているのであるが、なお最後の完成にまで赴かしめるために種々の名において、リンジーその他の要求が発表せられつつある。(リンジーはアメリカのデンバー市の元少年裁判所の判事で、有名な友愛結婚の提唱者)。ロシアは法律的にはすべてに完成せる資本主義国を目ざしているために、資本主義結婚が、ここでは十分に承認されている。

資本主義結婚——避妊を中心とする結婚、これは何故に起つてきたか。その主要な原因の一つは、無産者の経済的困窮のため、と同時に資本家生産が機械の進歩のために、人を必要とする率を低くしたためであり、他の一つは有史以後の結婚制が生む收拾しがたき破壊と矛盾の故である。

殊に近世における婦人の自覚は、この現象を単なる淫行としてではなく、一種の反逆行爲として現出せしめた。すなわち婦人の「産児否定」は、強権の歴史始まって以来のことであるが、（社会は婦人を地下牢に監禁し、監獄部屋的の不本意極まる出産を強制することによつて、婦人の真の自由な出産を否定した。それ以来婦人の反逆意識は社会への産児による寄与を、全然無意味とした。なぜなら監獄部屋的の出産は婦人にとっては屈辱以外の何ものでもないから）ついにその欲求が、避妊法の促進となつて、ここに婦人は反逆劇の主役を演じることとなつたのである。

かくて避妊法の濫用のため、婦人は恐らく性能を過度に傷つけることによつて、自ら不妊となることもあろう。しかし、仕方がない。資本主義時代の経済的圧迫と、結婚法の矛盾とが改らない限り婦人の戦いは必然に続けられて行く。

五 無政府恋愛の現実と未来

無政府恋愛の現在における一形式は、アメリカ的外貌を示すこともありうる。すなわち避妊法を駆使しての自由恋愛である。しかしながら、婦人がそれ自身変態化しているなら

はともかく、そうでない限りにおいて、すなわち真の無政府恋愛の立場にある限りにおいて、婦人は決して遊戯的恋愛に満足することはできないであらう。それ故、避妊を中心とする自由恋愛の場合においても、無政府恋愛のそれは、正しき態度のもとに行なわれるであらう。尊敬と愛による性生活——それはあるいは瞬間的のものであるにしても、あくまでもその態度は失われないうであらう。また、われわれは何時どこで、そしてわずかな時間における、切なる愛をもつかも知れない。そしてその愛の自由を否む何らの理由もないのである。

けれど、われわれはまた、熱くしてかつ静かな、尊敬に満ちた永久的の愛をもつかも知れない。それは「平和な結合」を示すものであらう。その場合、われわれはその愛の必然の結果として、決して他の愛に進み入るようなことはない。なぜならそれは不可能なことだから。

けれど、こういう場合がある。いま非常に不完全な結婚制の犠牲となつて、多くの子供をもち、経済的にも、子供への愛のためにも、全然別れることの不可能となつている夫婦がある。その場合、夫は普通娼婦のもとに通うとか、秘密の恋に慰められるとかする。がもしそうであるならば、彼はその妻にも同じことを認めねばならない。かくの如き夫婦は好ましいものではないとしても、今日のような社会では仕方がない。協議の上、そして愛をもつて、各々の自由を認め合うべきであらう。ラッセルはかくの如き二重婚を、未来の理想として描いているが、これはむしろ過渡期的の現在においてのみ許さるべきことでは

なからうか。

わたしは今、われわれの恋の三つの場合について考えてきた。

が、ここにいま一つの場合がある。それは、ある女が人の夫を恋している。その時はどうするかというのである。従来の自由主義思想では、人の夫などということとは、さまで問題にはならなかった。恋はそれほど利己主義であることが正しいとされた。また、娼婦だの、その他の自由(?)恋愛の女達は、人の夫であらうと、夫でなからうと、誰彼の差別なく「一夜妻」の習慣を強いられた。しかしながら、妻という者の立場に切実な認識をもつわれわれ自覚した婦人としては、妻を陥れ、あるいは妻を無視するということは、いかにしても不可能なことである。すなわちわれわれは、その妻に対して「女」としての同志意識をもつことをどうすることもできない。ここに同志愛との衝突が起る。

こういう場合はいかにすべきか。

わたしはこう思う。その恋が相思的のものでなく、自分一人のものであるような時は、もちろん強い自制力によつて、犠牲にしようがよい。またほかに相思的のものであるように感じられる場合にしても、妻の平和をかきみだすことは、いかにしても許されぬことである。妻が承認した場合は別であるが、その承認も悲しみをもつてされるような場合は、もちろん同じように犠牲にしてしまわねばならない。(小著『黒い女』『黒い恋』参照)無政府恋愛は、恋愛当事者のみの利己的の恋愛ではなく、すべての人々に対する尊敬と愛との中におけるそれであるのだから、利己的の満足のみが全部ではあり得ない。

かくて、われわれは、われわれの心が、ふと抱きそめた切なる恋を、強き理性と沈黙のうちに葬り、あるいは広き視野の中へ送りこむことを必要とするかも知れない。その時われわれの恋は悲劇的なものでもあるかも知れないが、それは仕方のないことである。われわれはあらゆるすべての人の立場を尊敬し、愛しなければならぬから、われわれの行為は決して簡単であるわけには行かないのである。

無政府恋愛の現在とるべき形式について、私はわずかばかりの私の考えを批歴した。そして私は未来の恋愛すなわちわれわれの理想としての恋愛を描く順序となつたのであるが、それはもういうまでもないことのように思われる。なぜなら、すべてのものの未来は、その現実の中に含まれているものであるから。